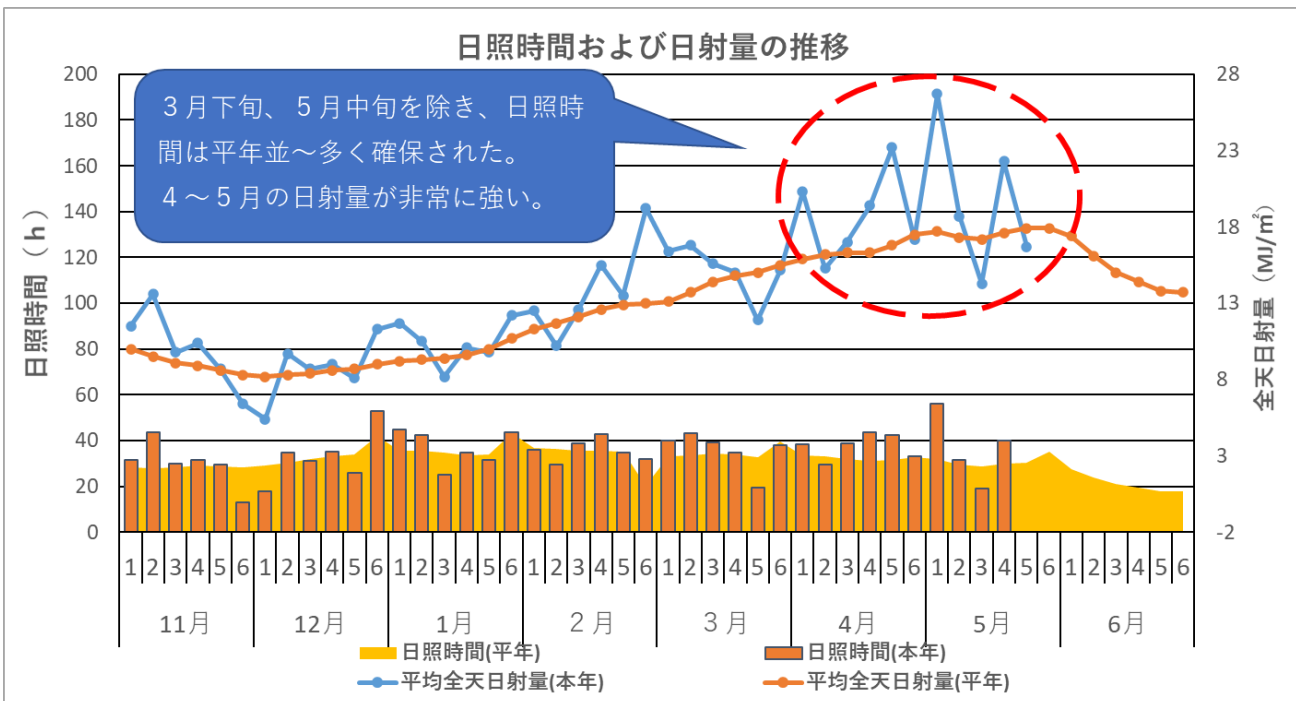
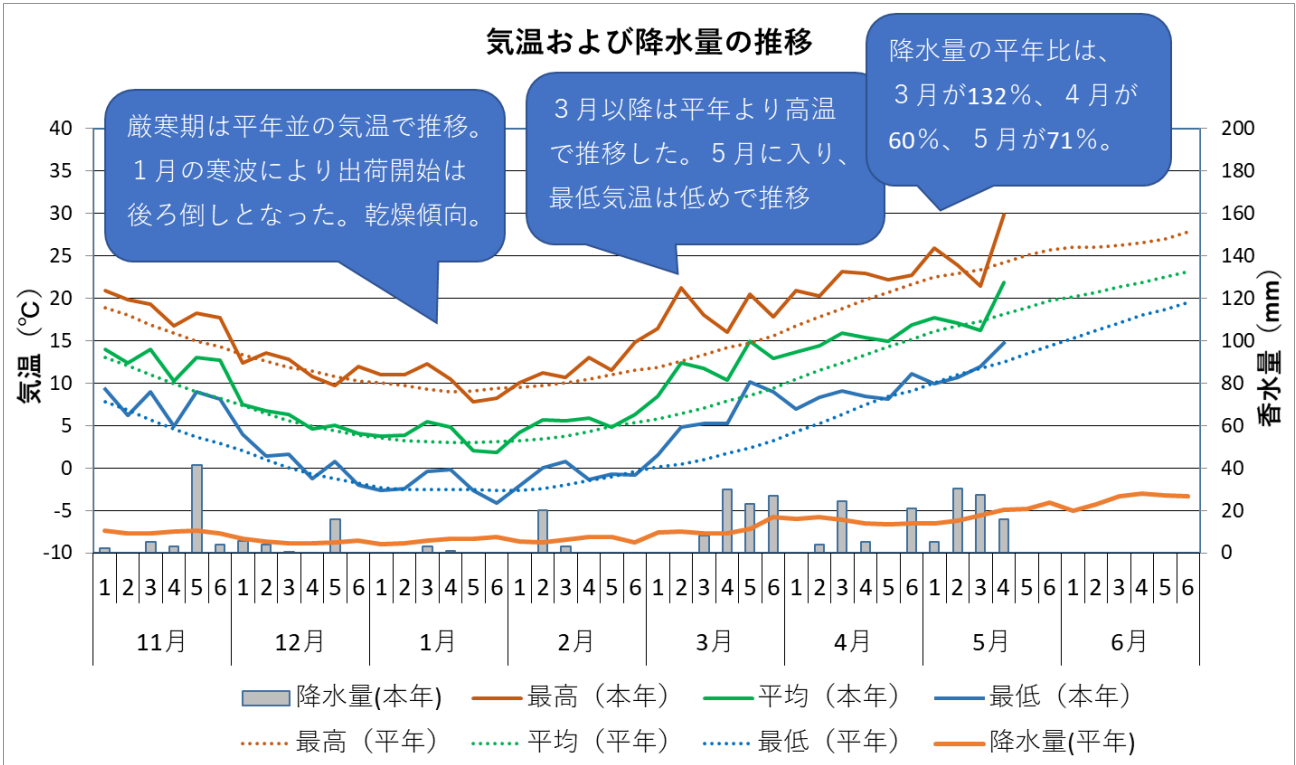


アスパラガス目揃え会資料（今後の管理について）

令和5（2023）年6月5日

安定農業振興事務所

1. 令和5年産気象経過（地点：佐野）



※平年値は 1991 年～2020 年の平均値

2. 今後の気象予報（令和5年6月1日気象庁発表：関東甲信地方）

気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）					
気温	関東甲信地方	向こう1か月 06/03～07/02	30	30	40
		1週目 06/03～06/09	20	50	30
		2週目 06/10～06/16	20	40	40
		3～4週目 06/17～06/30	30	40	30
降水量	関東甲信地方	向こう1か月 06/03～07/02	30	30	40
日照時間	関東甲信地方	向こう1か月 06/03～07/02	30	30	40

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

3. 今後の管理の注意点

- (1) 温度管理
- 生育適温は、地温 15～24℃、気温は夜温 15℃、日中 25℃程度。
 - ハウス内温度が 30℃ 以上で、穂先の開きが多くなり、35℃(地温 30℃)以上になると、伸長速度が遅くなり、高温障害も出やすくなる。
- 【高温対策】…妻面の開放、肩換気、夕方かん水、頭上散水、遮光ネット（30%程度）、遮光・遮熱塗布剤、茎葉の適度な整理による通気性の改善等。

レディヒート使用事例

佐賀県佐賀市

作物 アスパラガス
ハウス仕様 パイプハウス(POフィルム)
 間口: 6m × 奥行: 43m × 2棟 軒高: 1.2m

塗布日 2018/7/18
塗布方法 動噴鉄砲ノズル
使用缶数 1缶(2.5/10a)

- 使用目的
高温期の品質と収量向上、労働環境の改善
- 結果
- ・対照区に比べ塗布区では異常茎(開き)が減少した。
- ・塗布1週間後には収量、品質共に向上した。
(箱数が多かった)
- ・時間帯別にハウス内の気温を棒状温度計にて測定した結果、対照区に比べ塗布区では6～10℃低かった。

妻面から
約10m地点を
測定

塗布区

塗布区

8:00	10:00	17:00
30°C	33°C	26°C

対照区

8:00	10:00	17:00
36°C	43°C	36°C

撮影日: 2018年7月19日 快晴時

温度差6～10℃

※株式会社 誠和アグリカルチャ。HP 引用

(2) 水分管理

○アスパラガスは93%が水分。夏期晴天時の蒸散量は3t/10a・日(1株当たり1500mL/日)

○立茎期は、茎に直接水がかかると病害の発生を誘発するため、水の圧力を下げて、茎にかからないようにするが、**立茎後は畝が乾かないように十分かん水する。根は通路まで伸びているので、通路かん水する。**

○増収のためにはかん水量が多い方が良いが、排水が悪く水が停滞しやすいほ場では、多かん水による過湿害に留意する(適正な土壌水分の目安は畝の中の土が握ると団子が作れる程度)。

(3) 施肥管理

○夏芽時の追肥は9月まで3kg/10a ずつ5~6回で計15~18kg/10a

【追肥の目安】資材名：鮮彩美人(10:6:6)10a 当たり：30kg × 6回

○空洞(K過剰、B欠乏)、扁平(Ca欠乏)等の異常茎が多発する場合は、ほ場の肥料バランスが崩れている可能性があるため、単肥による追肥を行う。

(4) 立茎本数と太さの注意

- ・立茎数は8~10本/m、間隔15~20cm、太さは10mmが目安。
- ・立茎数が多いほ場では、斑点病の予防を徹底(下枝・2次側枝の処理、丁寧な薬剤散布)。

(5) 下枝や摘芯などの管理改善

○立茎時の下枝は地上60cm程度まで早期に切り取り、ハウス内の通風を改善する。

○摘心位置は120~140cm程度、下枝は60~70cmまで除去、2次側枝は随時除去する。

○側枝は20~25本で十分であり、擬葉茎数・体積が多く過繁茂となると株元に光が入らず、防除時に薬剤も行き届かなくなる。

○除去する側枝は、できるだけきれいに取り除く(残っていると病害の発生源となる)。



晴天時に斜めに摘心する

(6) 追加立茎について(アスパラガス大辞典より)

- ・追加立茎の目的は、①成茎数(春芽)の不足を補う、②翌年の春芽の増収効果(いん芽数の増加、貯蔵根養分の確保)、③立茎本数の調整や配置の均一化などがあげられる。
- ・追加立茎するとその茎が成熟するまで同化養分の転流が続き、同じりん芽群からの萌芽が1か月程度停止する。
- ・追加立茎は、地上部の空間を埋めるように、一隣芽群あたり1~2本を限度とする。

追加立茎時期	効果
7~8月	茎の成熟後に同化適温(18~20℃)を迎え、翌春の増収効果が見込める。
9月以降	茎の成熟後に同化適温を下回るため翌春の増収は見込めない。

(6) 病害虫の防除

【茎枯病・斑点病】

○立茎期～梅雨期の防除の徹底が、秋期以降の斑点病・茎枯病の発生抑制に重要

○立茎開始後の擬葉展開開始時期～擬葉展開終了までは10～14日間隔でこまめに防除を行う。

※特に、**新たに出てきた2次側枝は斑点病に感染しやすい**ため、十分に散布を行う。

○その後は、殺菌剤を20～30日間隔でローテーション散布（コサイド3000→アフエットフロアブル→コサイド3000）する。多発生が予想される場合は、散布間隔を短縮し、コサイド3000の散布回数を増やす。（農薬登録状況：令和5年5月29日現在）

【アザミウマ類】

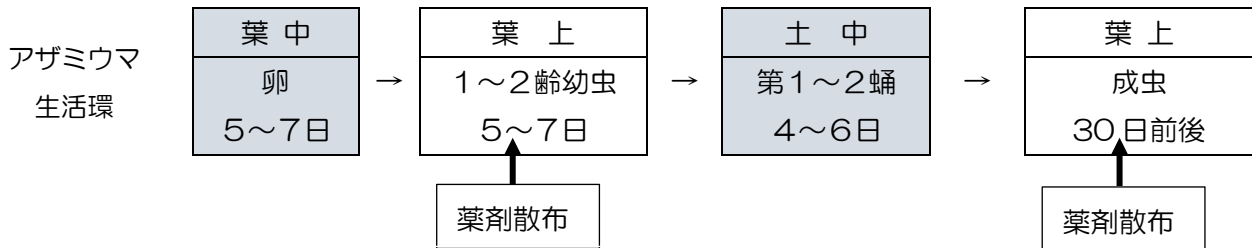
○高温・乾燥条件では発生が多く、世代交代サイクルが早くなるため注意する。

○擬葉の払い落としや青色粘着板による発生状況の把握を行い、早期防除に努める。

○防除 春芽開始時期：微生物系＋IGR系→寄生菌で防除、脱皮阻害

立茎時期：ネオニコチノイド系＋IGR系→浸透移行性で防除、脱皮阻害

夏芽収穫期：発生初期からの薬剤ローテーション散布で対応する



【農薬登録状況：令和5年5月29日現在】

農薬名	系統	対象	希釈倍率	使用時期	本剤の使用回数
スタークル顆粒水溶剤	ネオニコチノイド	アザミウマ類 カメムシ類 コナジラミ類 ジウシホシナガクビハムシ	2000倍	収穫前日まで	3回以内
スピノエース顆粒水和剤	スピノシン	アザミウマ類	5000倍	収穫前日まで	2回以内
モベントフロアブル	環状ケトエノール	アザミウマ類 コナジラミ類 ハダニ類	2000倍	収穫前日まで	3回以内
カスケード乳剤	ベンゾイル尿素 (IGR 脱皮阻害)	アザミウマ類 オオタバコガ ハスモンヨトウ	4000倍	収穫前日まで	2回以内
ボタニガード水和剤	ボーベリア バシアーナGHA (生物農薬)	アザミウマ類 アブラムシ類 コナジラミ類	1000倍	発生初期	—